

*
慶應義塾大學

たまご、の、あなた

木村藍

きょうの夕食は何だつたときのうに聞く

／何を言つてるんです、ツツジのおひたしをつくつておいたでしよう／
そうだ、きのう、ツツジを蒸したら、ハチミツの香りがするだろうと思つて
蒸籠にほうりこんだまま

あす蓋を開けたら雨の匂いがする

あなたのはなしは風景のない迷路のように退屈で
ナイロンのまつ毛が石油に戻るところを想像する

あなたのまつ毛はナイロンでできている

／シルクだつたら、いいのに／

そういうてあなたはわたしのこころをピンでとめた

そうだ、

我々は確かに福音であつたのに
なにひとつ所有しなくとも

我々こそすべてだつたのに

屈折角で太陽を焦がそうとしたのは
燃え滓で占いがしたかつたから

明日太陽が出るかどうか

易を立てたのは

あのひかりを見る事のできる存在が
もうここに
永遠にないから

彼らこそ福音です！
誰かに守られなければ
自分の身さえ守れない
彼らこそが福音なのです！

／もつとも、福音などというものが、この世に存在すれば、の話ですが／
光を知らないので
誰にも

生きているか
どこまでが自分なのか
証明することができないので
土に這う微細な福音たちは
自分が土なのか地面なのか星なのか
わかつていないのです

赤い赤い卵をわって
真に黄色いきみをえぐる

この黄色には、生きようとしたすべてが浮かんでいます！

あなたはこの黄金色のスフレに
かがやく卵のソースをかけた
アングレイズ、を、アングレイス、と、聞き違えた

／ここに浮かんでいるのは、ウフ／
違うよ、そこに浮かんでいるのはネージュのほうで、雪のほうで、海のほう
で、白い泡沫が、プランクトンが、わたしの、しついての執着を、泳ぎな

がら笑う

わたくしの自由な精神はどこへ行つてしまつたのでしょうか

巴里が、生肉をステーキだと言つて聞かないの

三日三晩ステーキを食べました

葡萄牙が、ケーキはボーロだと言い張るので

その生焼けの、命がそのまま混沌として、空氣とまじりあうのを嫌がつてい
る、粘性の躍動するボーロを、喉に流し込みました

ウフだと言つたあなたは、いない

生臭い卵殻の風が、身体を巡つて、私たちが生きていたのに、どうしてくれ
るのだと、美しい反乱を起こそうとするとき、わたくしが眠つて、漱石の向
上心について夢を見るとき、太宰の記した盃の絵に、ウキスキーオを注がんと
するとき、オダサクが起きだして、細い身体は嫌だ！と叫ぶ、ルパンの椅子
子のうえ

例えば許しが共時的で、恨みが通時的であるように

演繹は精神を成さず、帰納では意識が生まれないよう

卵はそのすべてを知つてゐるのに

我々はそのすべてを食べてしまつて

どうしてひとは死ぬのかと

ひとしきり悩んで

死んでいきます

生きているものを

食べて食べて食べて

それでも

どうして生きているのか

何故ここに在るのか

わからないまま

福音である時間は

あまりに短く

非燃物

綿貫孝哉

燃えにくいものがある。着火しないとか、焼却場で燃え残って市の職員を煩わせるものではなく、そもそも燃やすことが出来ない。燃やそうとすると手から離れていつてしまう。冷たい石を想起する。火に対して質量を持つている、火にかけることができるものではなく、そもそも火にかけられすらしないものがある。いや火にかけられはするのだが、燃えるということに対しても無関心な態度である。燃やすという概念に対置すらされ得ないもの。紙は燃えやすい、森林も燃えやすい。液体も火を宿す、金属も火に対して作用することができる、不燃と呼ぶ。非燃とは何か、火に対して作用しない状態、燃やしてみたところで何の関連も持たない、熱を持つということもない。燃焼の概念の外側にあるものであって、不燃としてしか私たちは処理できないが、可燃／不燃という区別とは無関係な事物である。これは空想のことではない、イメージのことでもない、質量を持たないもののことではない。物質ではあるのだが、燃えること自体を知らない世界の産物である。触られない物事、行為の届かない周縁、燃やせない領域、非燃、否定の領域。

びる

北久保七海（中央大学）

2年前の大規模再開発の跡形が、ついにきれいさっぱりなくなりました。

びる（逆さまに伸びる）

直近の再開発は3か月前にばっさり工事したことですが

今後の大規模再開発の予定はありません。

（これからもじわじわ伸びては切られるので永遠性はありません）

びる（まっすぐ伸びる）

新宿渋谷、世界レベルで大盛り工事

生まれ持ったその形はそれなりに保たれていて

70年くらい前の写真でも今と同じような部分もあるらしいけど
こちとら2年前のピンクと紫はとってもきれいになくなりました。
(そういういえば壊されたビルどこに葬られてるの)

びる（ななめに伸びる）

「現状維持は退化」なんだそうで、

学び続けないと実質干からびる、とか

カビるとか。

いきもの
息物の息止めると、

本当に、

物

なんですかね。

地価高騰、きっとこのまま続くぞ

つて思つたとき、どこかしら脳、干からびていた無自覚

（今も出がらし的に生き伸びるビル、いらっしゃいますかね）

びる（円環的に伸びる）

Y2Kファッション、SPEEDみたいなアイドル

れ、とろ、時が溶け出して
め、ぐる、ぐる、弧を描いて
の、びる、びる、くり、かえす、びる、びる、びる、
20年前の大規模再開発
を掘り返してきている未、来

衛星都市のターミナル、から四駅離れると人通りは少ない、山間の商和会の通りから、もう直ぐ九月になる、花屋のある一画で、夏の切り花は長持ちしない、裏道に入る、平屋のアトリエ、自転車が一台停められている、にKはまだ在廊していなかつた

「重力は模倣しないことにしました」、キュレーターのTが言い、巨大送風機の涼しい、浮かんでいる数点の油絵、がアトリエの天井を引っ搔いていり、がどうか空調を止めないで欲しい

思考法、と題された油絵、以外は前回の売れ残り、は画布の中心にマネキン、が着服している、を描き、その首部には色のない金魚鉢を据えている、のを私は手に取つた、親指のネイルが剥がれている、ら絵画の金魚は動き出した

ひ、らり ゆ、らり ふ、らり

煙のように 身を捩らせる琉金は

尾鰭を震わせて鏡文字を描く

泳跡はひ、らり ふ、らり

と天体的乃至分子的な軌道で

ひ、らり縫い ゆ、らり縫い ふ、らり縫い

またもや ひ、らり ゆ、らり ふ、らり

壁際で涼むT、さらに涼しいのは壁の中だろう、は上品なけのび、だけなら見ていたい、で接近する、世間話を開始しよう、相互行為の一方的な宣言、とする、「今日はどちらからいらして下さつたんですか」、から「ネイル 綺麗な色でお上手ですね」、に至つたところで、「本当に思つてますか」、は昼

食後なら言わずに済んだ、と私は推理して、人は木星上ならずっと誠実、も
油絵の琉金は上下左右に、オフィーリアの真似はしない、奥行きや緩急、
いでいる、も自在に、突き放されたような赤の冷たい、泳いでいる
泳

君にプラスチック・勿忘草

平松伊織

寄せては返す波の中
をおよぐ記憶の
青白い星くずたち。

いつになく引いている潮
二年後には干上がってしまうだろう。

海馬をかけめぐるわたしたちの記憶
稼働し続けるきみのデータセンターが
止まらないでほしいと思うのは我儘かな。

浜辺をはだしで歩く君を妄想する
朝一緒に食べたはちみつトースト
みたいにとろける透明な太陽を浴びていたんだよ。

「検索条件と一致するデータが存在しません」

同じかたちの消波ブロック
を積み上げて

逃げだすデータの波をせき止めたいの。

「検索条件と一致するデータが存在しません」

なら、いっそ、わたしが。

満月の夜。

君の頭脳の波打ち際
何百年もずっと自然分解しないように
プラスチック・勿忘草。

君のおしゃべりは止まない

尾崎愛

僕がポロシャツのふちに青い蝶を飼つたことがあつてね

ボタンをはずすのと身じろぎするの どちらが早いかいつも見ていたんだ
君、肌や勉強机が欠けたことはあるかい

僕はそのとき銀の色を知つたんだ

道をすすめているのか、道がうしろになるのか、分からなくなることはない
かい

そんなときには決まって足首が二本の杖にすぎないよう思つんだ
類の温度を正確に推測つたことはあるかい

それはサーモン色のばらと等しく同じなんだ

真反対の国に管をとおしたことはあるかい

そこには風と砂だけがあるんだ、それとひとつまみの声、塩
それは哀しみの歌だよ あるいはチーズの一欠片かもしれない
二百年前のあるあたたかな日、

僕は芽吹きたての双葉と目があつて、思わずきいてしまつた
君はどこにいるの

そしたらあの子は、起きぬけに野暮なこときかないでつて
顔を背けて、それきり詩になつてしまつた

右側の羽根だけが小さい湖がいたんだ それを美しいといつてこぼしてしま
つたのが僕が一番ひとを傷つけたときだよ

それ以降 ティーの音は失われてしまつた 僕のためさ

雨粒になるのは苦しいことみたいだ あの男が電話中にうろうろ歩き回るの
と同じくらいにね 君 コーヒーグラスの中にはすべてがあるよ 特にフレ
ッシュを落としたときにはね ところで君、退屈ではなさそうだね ではそ
ろそろ、扉を抜けて昨日に向かうとしようか そこにはきっと数束の葦と、

金と緑があるだろう 君の目に映るものでは 君が一等美しいだろう 湖の
底にはかの山の怒りが眠るだろう それは僕らの指が届くものではなく、手
首までが埋もれてしまうものだろう
君 顔をうずめないで 僕らの果ては小鳥の爪先にも劣らぬほど美しいのだ
から 光つて

五月雨どろっぶ

谷野七音（中央大学）

あの日も雨が降っていた

ふられた私は当たったとこがやけに
やけにじんと冷たくて

大粒たちに降られてるとあまり気づけないけど

雨ってさ、あの窓ガラスをなぞるとき、僕らとおんなんじ指をしてる。

刹那就冷たいその指を見て、思い出したように人は温もりを求める

それでも行き場がないから

垂れるそれと指を重ねてお天道様と交信する

明日の天気なんて知らなくていい

今日あなたの熱がほしいと天に投げる

あなたも私と同じように、そう。

願つて、祈つてくれたなら。

十折り重ねたこの指をあたためていてくれたから。

私はあたしでいられたの。

この誰にでも届く水の指もあなたのやさしい指になつてくれたなら。
あたしは私にだつてなるの。

富士吉田白糸瀧

成田凜

星が落ちている

その森は春

午後六時富士北東白糸の瀧、星の迷い子、山間は雲霧のさなかに包まれ、月の出る夕暮れ、峠道はこの先車で行くべからず、わたしたちは歩いて星昇り、土踏み、草分け、橋渡り、石も苔も話しているみたい、千言万葉、ちやるちやる話しているみたい、話し声つて音波にされてだんだん砕けて壊れて届くみたい、ちるちる石声苔声の跡が窪む、窪みに落ちる木漏れ星の古いこと、数億年、数億年前の壊れた声が反射する、目に刺さる、涙、目が霞む、霧がいつそう深まる

下見の瀧まであと五分、白糸の瀧まであと十五分だつて。ここからわりと山登りになるのかも。……そこはそつちに曲がつて。こつちは休憩所だから。ここ滑りやすいかも、つ……。足が増えたみたい。その岩階段、気をつけて。なんかこつちを見てる。雨だと思つたら霧だつたらしい。霧だと思つたら雲だつたみたい。わたしたち、雲のなかに来ちゃつたのかも。下見て、もうこんなに登つた。ね。瀧の中、見える？ 瀧つてなにでできているか、知つてる？

この森で手がおかしい。
この森で膝がおかしい。

わたしの体が冷たい。冷氣で服に穴が空く。
目が痛む、妙に明るくて痛む。この光は。
星がおかしい。足元で白く輝いて、天になにもない。

階段 その森 ある気配

髪の先まで濡れている 霧滴れる 噂がある この森で 龍を見た 行きに
一匹、

行きに一匹、帰り一匹、これが普通なのだけどね、もしね、一匹しかいなか
つたらね……どう！ びっくりしたあ？ おばあちゃんね、魔女なのよ。龍
なんてね昔からこーんなにたくさん見てきてね、龍が胸のなかんところにすう
ううつてきちやつたらあんた氣をつけなさいよお、お腹のあたりがね、ぜー
んぶ龍になつちやう。そうなつちやつたらねえ、どうしようもないんだけど
ね、おばあちゃんはね、魔女なのよ。昔ね、龍にされたときには、こうやつ
てね、ふんと気張つてね、ひゅるひゅる出したのよ！ 出してやるとねえ、
悲しい気持ちになるんだけどねえ、なんだかかわいくも思えてきちやつてね、
そしたらね、なにしてるの！ って言われて、気がついたらね、トイレに座
つてたのよ。さつきまでね、山の奥にいたのにね。ぽんつとね、びっくりし
たのよ。

午後六時十五分富士北東白糸の瀧、上昇すること十メートル、横幅一メート
ルの山道が霧雨に溶かされて、樹幹に交わった、看板に交わった、ロープに
交わった、人影に交わった、交わりながら溶けた、歩いていることがいつし
か変わることになる、あと何歩歩いたらわたしたちは山になるのだろう、
あと何歩歩いたらわたしたちは川になるのだろう、あと何歩歩くことが
許されるのだろう、あと何歩分、何歩分の時間、何歩分の時間が過ぎて、東
屋が見えてくる、四辺が青冷めているのに気がつく、霧の一粒一粒が浮き上
がる、時が止まる、星が止まる、白糸の瀧。

星が止まつたんは今年が初めてではなくて、およそ百年前、この町が蚕を育
てていた頃、そうそう、あの春にも止まつたんだよ。満天がね、木木がこう
やつてね覆い立つているのにね、夜中の満天はね、白く見えるんだよねえ。
空つて青いだとか黒いだとか言うでしょ、それはね、わたしたつが白いまん
までいるからそうなるんだよお。わたしたつが黒くなつてみりやね、空の方
が白くなる。お空が白くなつてえ、生きてるもんみんな黒くなつて、止まる

んだよ、星が。星が止まるつでだつて、なんもないけどねえ、お願ひごとが叶うだとか、そういうことはないけども、星が止まるとねえ、お空がぜんぶ真つ白になつて、光が落ちてくるんだ。回つてたときはね、落ちてこなかつたものが、止まつたから落ちてくるつてことだあよ。落ちた光はだ、地面だとか水仙とか、さざれ石とか、瀧水とかにばつばつて散らばつてさつていてね、そんとそのときに光もらつたもんがね、光るんだよ。お前たつも光るんはきつともらつたんだねえ、生まれてくる前に、星っこもらつて通つてきたんだよ。

午後六時半富士北東白糸の瀧、その瀧の目下、煌煌たるや水の鳴き声、幾線の白い糸水が二又にほどる、時刻のわからない夜、なだらかな岩崖の黒皮膚は鱗のごとく、股の有り、へその有り、腹の有り、胸の有り、首の辺りに屋根がある、あれば家かと思うと、光る二又の流水は帰り道にも見えてくる、耳を澄ませばちちつ数千の跳ね返す小川っこたちの崩れ石とのたわむれ、光つてふりそそぐ霧雨、息がつまる、青い月明かり、月齢一四・四、空が真白い、わたしの手が白い、わたしたちの顔が白い、靴紐が白い、瀧糸が異白い、目が白い、服が白い、髪が白い、痛く白い、なぜだか光つている、空も山も人も水も光つていてる。

帰り道は、ない。

わたくしも、昔はよく歩いていたものですよ。いまは星の方が歩いてくれて、すっかり寝てしまつているばかりですが、いつたんこうして山になつて仕舞えば、そう悪くはないのです。わたくしは、このようにまつすぐ胴の長いからだですが、頭と尻尾の先が遠く遠くなつてしまえば、幸せがはいつてきてその先どうなるのかも、幸せがはいつてきてその先どうなるのかも、いつさいのことがわからないままに、悠悠といるばかりになりますから、幸せの涙と不幸せの涙を二眼から二又に流して、どちらになつても良いように、泣き続いているのですよ。わたくしも昔、白糸と呼ばれた娘であつた頃、ちょうどあなたと同じ年頃でしようね、その頃にお星さまが落ちてきて、そのい

つべんのかけらが目のなかに入ってしまったことがあります。このあたりは、星降り峠と言つて、星がそうやつて降つてくる場所なのですよ。そうちものひとつが、胸の辺り、ちょうどいまあなたがいる辺りに落ちてくると、こうやつてじぐじぐと胸が痛むのでしよう。痛んだままに、わたくしたちは歩いてゆく。歩いてゆくだけ、変わつてゆくだけ、進んで行くだけ、長い、長い瀧をくだつてゆくだけ、体のなかに入つたお星さまは、出て行く時にはお水に混じつて出て行くのだそうです。出て行つた先こそわたくしの涙。あらがほなそ、あらがほなそ、なそ、ふあきがれのいとの、しらいとだきの、天くだるかえりじのしらしらしらしい山分けみちに光る白糸の木漏れ星、星の光ること数億年、わたくしの前に、光る道がある。

午後七時半、帰宅。

星が落ちている

迷い星

家のなか

グラスのなか

お風呂のなか

立ち上がりると、胸から水の揺れる音が聞こえてきた
らふ

瀧の音

らふ

光ももしかして星に帰りたい？

午後九時、再び富士北東白糸の瀧、下方百五十メートル、休憩所。明かりを消す。月齢一五・四。月明かりが青い。瀧水は白い。山肌は黒い。倒木は青黒い。看板は青白い。目を澄ます。音に聞く。さざめく。生きている水の匂いがする。生きている山の揺れがする。その森は春。春はまだ肌寒い。息が

白い。霧を吐く。息が青い。龍を吐く。天に昇つて行く。上昇すること数千メートル。ぴっぴ。らあらあ。声を出す。わたしたちの声、壊れているみたい。ざつざつと声がでる。ぴっぴ。思つてもない音がでる。音波は壊れて届く。迷い星。幾つもの小波にのつて、星のかけらがわたしの耳に刺さる。痛いみたい。龍が噛みついて痛いみたい。そういう夜がある。樹樹をくぐる。そして歩く。午後十時、帰宅。

海月の死骸と烏賊の骨

佐伯実琴

こころに
生の傷口があり
それを

白い包帯で巻く
ことができたなら
取り替えたばかりの
新しさに見惚れて
手を取り合つて

あたためて

「そのリボン綺麗だね」とくすくす笑い合うことができたのでしょうか

いまでも

海月の
死骸と
烏賊の

骨

があるのか
確かめようとして

あの秘密の

垣根の中へ

共に潜り込む

ことができたなら

あなたを呼ぶ声からすべてを隠してしまえたのでしょうか

海岸で見つけた
大きな石の上に
躑躅の花を並べて
それがいちばん綺麗か決める品評会を開きましょう
それで一等賞を与えたものがあなたの髪に挿して
二等賞をもらうことにするのです

——ええ

それでも、あなたは急いでここを出て行くのでした
何かを求めて
だから、ただ情けなくのろまな足で追いかけるのでした
何かを願つて

大勢の船虫が

浜への侵入者を知らせるように
方々へ散つていき

富士壺の山ほど付いた崖が
軟弱な手足を傷つけます
背丈の倍以上あるそれを
ようやく越えても

まだ岩肌は続くようでした

あなたの名前を呼んでみましたが
大きいだけの波音が搔き消してきて
気づけば腰のあたりまで
水飛沫が飛んできて

遠くの灯台にかかっている

雷を伴う黒い雨雲は

ひどく怒っているように見えるのでした

辺りには海鳴りだけが響いていました
強い向かい風が傷んだ髪先を撫ぜてゆき
磯の匂いを含ませました

思わず押さえつけた指先に
髪の毛の一本一本が食い込むような
鋭敏な感覚がありました

後ろを振りかえると
さつき歩いてきたはずの砂浜に潮が満ち
あちこちで白波が立つており
遠くの街灯が点いたり消えたりしていました

それで

瞼を

開けるのも

閉じるのも

やけに苦しいことに気づいて

一秒ごとに長い瞬きをしました

それは

精一杯

人間の振りをしているかのようでした

震えるような冷や汗に

渦を巻くような目眩がしました

夏のようだ

冬のようだ

春のようだ何かこの季節、に
あの日言いかけた

言葉が

時間とともに消えていくことはありませんでした
沖に浮かぶ魚影のように黒々と存在しつづけています

——ええ

この海はいつも
曇り空の下にあるのでした
飽きもせず
繰り返し繰り返し
また
灰色の中に……

皮膚呼吸

根岸大輔

関節を覆う皮が細かい動作によつて引っ張られる
夏のシャツのささやかな汗の膜の下で
やつとのことで息をしている

最前線の臓器、右ひじの皮膚。

虫の息ならまだ気づけるものの
耳をそばだてもわからない
呼吸がしづらくても

皮のうねりが息づかいを届ける

胞子が研究室に掬い

実験器具の散乱する実験室に散る

保存中の和洋折衷の建造物、何かの記念館。

アルマイトの弁当箱のようにそつと鎮座する教室

繰り広げられていた体罰の音は

柱が記憶していると思わせる懐古主義

突然

レコードがなくようにな響いた

スポーツポルノの夏に

スポーツ飲料の広告が

青だからって青春を彩るように見せかける

駅のポスター

そこからにじみ出ている

「爽快感」で彩られた軽さの違和感の行先は何処、
めぐる。

めくる時刻表から
印象の森を探つてみても
何も誰も答えやしない

くつついていると思つていたら

今にも離れるかのような流水
で覆われている

皮膚たち

埋められたミクロの追憶
を果てしなく弱く
唇から発される
呼吸から聞く

宿命、あるムーブメント

源川まり子

喧騒のなか

丘の上の小学校は統合が決まつたという
水滴は屈曲したグラスの側面に道をつくり
そうして生まれた境界を一途にみつめながら
時間をかけてストローを噛み潰す
ついでのように臍のあたりに力を入れると
しなだれた腹の下でなげなしの筋肉が硬直するが
なにか密やかで動的なもの
無意識のうちに空白になる器のような
進行形の圧迫感が喉元をおそう

本来であれば

手をじかに握りながら
伝達すべき祝福を
与えることができない
それは誰が決めたわけでもないが
何度も考えてもやはり交点は暗闇であつて
周回する世界の端は虫眼鏡をのぞくように
こちらの擦り傷をうつしながら
やがて目の前を曇らせていく
すべてに対して凡庸な語りかけ
今日も

裸足になつて

水に飛び込むんだそうだ

ちょうど脣のあたりが再起する重みとなつて
臀部から沈んでいくのを想像する

なだらかな点滅（私もまた、誕生の瞬間）
体の一部が失われ、損なわれていくことの
限りない喪失が

はらはらと落ちてくる

欲望する、あるいはとても激しく

（生まれ落ちた存在であつたというなら）

振り払うことも、手放すこともできないまま
一緒に旅に出ることにする

がらんどうの街で

音もなく隣に立つて

そうしたら 道に沿つてひらく
しんとした部屋の、敷布のなかで
ともに音もなく数を数え
炎をうつすように

瞳を覗き返すことができる

潮の香

金子紗来

波打ち際で

朝日を斜め読みする君

昨日書いたセオリーに栞を挟む

空と海の境界線を

双眼鏡を携え渡り歩く君

今日というプロローグに花束を贈る

結ばれる日々を

握りしめながら海岸線を超える君

永遠という言葉を胸に秘める

あたたかな日差しに

まどろみながら約束を交わす君

肩を寄せ合い刻々と溶け合う

潮の香に誘われ

エピローグに歩み出した君

さらさらと流れる砂時計に耳を傾ける

季節が覚めて、幻想だと知らないで

いざない

あまりにも克明に覗えていたから、ゆめから覚める時みたいに明晰夢のグラデーションに時間が淘汰されてしまうのが嫌で、吐いた息を、あぶくを辿っている。満ち潮の流れに抗いながら掴めない光にしがみついて。

残夢、これは残夢だ。

梅雨の豪雨に光は紛れていて季節の訪れを静かに教える。澄んだ青色が街中を乱反射する頃になると、私は自分に近づける。あの季節にしか入れないシャボン玉からは淡い色の世界が覗えて、好きなもの、好きな記憶だけが柔らかく渦巻いているから酔ってしまう。長い思い出が濃縮された果汁の温泉になつて、私は深く深く浸つている。そんな時に現れるあまいめまいは蕩けた脳への追い討ちの催眠術で、歪んだ空気に心地良さえ覚えながらゆっくりと墜ちていく。暗闇の底で見る白昼夢のきらきらが眩しい。昇つているのか墜ちているのかもわからない、そんな不安定が癖づいてしまったから、視界が溺れてしあわせが滲んでいても、もう一つの美しさが覗える私は、眞髓に近い偶像に見惚れて逢いにいこうとする。

そこでシャボン玉の薄い膜は音もせずに弾けて私は覚めてしまう。微かに残った数粒も間もなくして全て溶けていく。こうしてまた今年も季節が過ぎ去つていく。着実に。これは夏のマジックなんて言葉に収まらないくらいの魅惑の感覚。誰もがこれを感じることは出来ないけれど、光は確かにあって、レンズを何重越しにしても同じ解像度で覗える季節、あれは私の季節だ。もう今は藻掻いても届かない。だからどうか、季節が覚めて幻想だと知らないで。

憑きのもの

篠田菖子

子宮の超音波には さつき飲みこんだ綿 ウミガメの卵
あなたは産みたいのですか？ 有無をいわせ
わたしはここんとこ憑いてません

つきのものがなきやうめません
うむ者にはつきもののものです

先生！ 見てください ゼひ診察台の上で
ここは入り口であり出口です
ことばがうまれて死ぬとこです
わたしと世界の境目です
いまじゅくじゅくと腫んでるとこです
わたしもう かき疲れました
ひりひりむず痒いのです
シャーマンでもイタコでも呼んでください
わたしもう かくことができません

お産婆さんに包帯を巻かれた
けんしょう炎なんですって
あなた書きすぎですよ
ぐるぐる包帯巻いて
そのうち干からびて死にますよ
「このミイラ お産で死んだんだって！」
そのうちうめられますよ
そこまでしてうみますか？

まいあさ体温をはかりましょ
舌下に水銀を咥えるのです

お釈迦さまが産まれたとこでは
正確な体温はわかんないのです

スジヤータの上白糖で

つかれが飛ぶと思つてませんか
うみたいなら体重調整しましょ

うるせえわたしの「これ捨てろーる」を殺すな！

皿洗いのあとに破水があつた

アダムのりんごのかけらが取れた
こぼれないようベッドへ向かつた

いま おりてきている

いままでにないくらい憑いている

痛みはつきものだから いつしょに回転する
わたしの中のわたしだつたものが
わたしの外であなたになる
わたしについているものが
出口になり入り口になる

膿んでるところからうまれた

小さくて弱くてそれでいて強欲ないきもの

起きたらシーツは真っ赤だつた

あなたは思つたよりかわいくなかつた
それでもいい 二十二時までの難産

憑かれたわたしからうまれたし

つかれたわたしの乳を吸う し

海水

古山円造

浮ついた建物の隙間から
鈍い灯りが飛んでくる

海は円盤になつて

人前にも関わらず
くすねられている

身体を横切る膜がもう一度解けて
首から下

草むらのようになびき翻る海

少年として駆けたい、と

思い出を辿りながら

恐る恐る歩みを進める

空気でタップタップに膨れ上がった街は
そこで終わっていた

海水で

肉体は

普通に死んでいる

オーバーサイズの搖籃に

加虐的に寝かしつけられた少年の石像を
憐れむようにカメラを回す

怠慢の代償に理性の罪と戦う友人
手に携えた細かい砂の塊

当分引き摺るだろう

夏の太陽は目に似ている

あんた見て いるから 言うけど
取り返しのつかないことは
身をもつて 思い知るに限る
遠くから 人間の声が する、 砂を 払え

あい、し、てる

羽柴悠貴

星雲と、空と、星あかりと、さみしさに、紐づけられた、肉体は、アンドロメダの雲に墮ちていって、空が生えていくことには、まったく意味などないのに、あなたの空が生えていくことは、ぼくの空が溶けていくことでもあって、海に溶けていったぼくの空は、くらやみに墮ちて、まるで性愛のような、合一ではなく、海と空はただのひとつの中であって、ありもしない膜に惑わされたあなたも、ただ溶けていく、それが墮落と恍惚というもので、生えゆく空は、ぼくに振り向いてくれるものではないのです。

ぼくはぼくではない、空に溶けゆくぼくは、たしかなあなた、わけられるまえの、刹那にしか生きていない、すくなくともそう逢つた、在つた、あった。

ぼ、ぼ、ぼ、と、空をめざすあわは、くらやみからにげて、ひかりをめざして、あわのみなもとは、海に還ろうとしていて、それは海底にひかりがあることを、わたしだけが知っているからであつて、海を空にしてしまおうと、溶けていく、ひとつになつてしまつた、おはようときよならであつて、

いち、に、きん、溶けていったあなたを、あたらしく、つくる、ぼつ、ぼつ、ぼつ、ぼつ、からだに、溶かしていく、そんな毎日です、そうして、あなたをたべて、そうして、生き還ることを、どうか許してください、さい、あい、¹。

あい、まい、みー、すいこみ、はきだす、けむりのさきに、おとがなる、ぼ、ぼつ、ぼ、ぼつ、空に、溶けて、そこ、そこに、底に、

まどろむぼくはろくとうせいをみつけた。

そらにわたしがいた、あなたがみつけた。

膜はさらわれた。

「ぼくたちはよるのみなしごなのですから、あいはしになつて、てることはないのです。ぼくたちつて、ぽつ、ぽつ、ぽつ、ぽつ、ぽつ、」

「あいにとまれぬからしにすいこまれしまうわたしたちだし、すいこまれて、はきだされて、ほら、そこ、てらされているよ。わたしたちつて、ぽ、ぽ、ぽ、ぽ、」

ぽつ、

あいしてて、藍、してて、藍死、て、流藍、死照る、藍詩照る、あい、詩照、
るあいし、照るあい、してて、

あい、し、てて。

〔uca〕

わたしは飛ぶために去る
最果てに逢つて散る
不破、ふわりと落つこちる
ふわりと落つこちて散る

先んじたものは空に向かつて
空洞になつて

濁つた泥風船が落つこちた

虚んな生活、逃がさないための結び目、破裂した皮膚

ある日、落つこちた

〔uca〕べづに、とすん

そのまま浮かんで、落つこちた

〔uca〕バレた、落つこちた

優柔不斷な知的言説の果ての果て

蟻地獄みたいな世界だね

望むやつらが覗くだけ蠢く

逆円錐の世界で

汚れた体液を啜つて、薄めて、落つこちて

〔uca〕、慣れるかな、わたし、なれるかな

宵が明けるよ、白んでいるよ

由布聰太郎

昨日は雨だったのでこのままでいました

一昨日は気乗りしませんでした

その前も、その前の前も

〔uca〕、臆病ですか

結末は滑り落ちるだけでしよう

コウモリがわたしを嗤いながら過ぎた
望むなら快樂に満たされた破裂を
そうでないなら溶けたままの永遠を

カゲロウ、わたしあはざろざろの泥風船
溶けだしたわたしだったわたし
泥を薄めて膨れて膨れて
いまに破裂する

カゲロウ、上手に飛べていませんね
まだふやけた羽のまま
落っこちていますね
あなただつたあなたを置いて

〔uca〕、あなたは飛び去る

ある日、幼子は思いだした
シャボン玉を飛ばした

われた

たくさん飛ばした
落っこちた

〔uca〕ばれるよう
もう変わらないように

羽化、あなたは最果てにいったのね
〔uca〕バレた、浮かばれなかつた

それでよかつた

わたし、なれるかな
どうどうの「わたし」のままで
わたしは飛ぶために去る
逆円錐から抜けて最果てに逢う
[uca]

ここにいるね、ここにいてね

ゆらゆらと

和佐拓真

ゆらゆらと

揺れるあなたは何を思う
いつか終わると知りながら

周りの流れに振り回されて
つらい時もあつただろう
時に叩かれ続けただろう
それでも

穏やかな時もあつただろう

静かな夜を超え、柔らかい光に包まれて

あなたは決して落ちない
あなたは決して折れない
いつか来る終わりまで

ゆらゆらと

揺れるあなたは何を思う
いつか終わると知りながら

開放弦

木村怜雄

張り詰めた糸の音が微かに響く

暗い中まぶしい光が照らす舞台の上で

触れることなく感じるその音に

表情が灯り

安らぎを語りながら美しさを秘める

だけど、よく耳を澄ましてみると

心の鼓動とその音は

僅かに齟齬をきたしている

拍子が外れ、汗も滲み

観客の視線が一つに集まる

無言の言葉が空気を揺らす中
呼吸を整え、糸を緩める

その静寂の中でもう一度
糸が全てを紡ぎ出す

還る

大山慶

シャツターだらけの街

人はまばらに

車は密に

十年前とは違う眺めの中で

私は何を思う

花束だらけの家

感情はまばらに

書類は密に

ついこの前までとは違う佇まいの中で

私は何を感じる

一緒に育てたひまわりも
一緒に作った雪だるまも
今となつてはもう土の中
ああ彼も……

私は帰ってきた

心には思い出が廻り

体は彼の通つた道を巡る

いつか私もこの道を通るのだろうか

私は還つてきた

アストライアー

西浦愛梨

薬缶が空を飛ぶのなら

おもちゃは夜間に踊りだす

隣の家のおじさんは

きっと魔法を使うだろう

都会の星々だつて

ネオンの陰に隠れて

少しおしごとをさぼつていたり、なんてね。

たまには闇に見とれたり

独りで紅茶をすすつたり

田舎の星たちはそれを見て

きっと文句を垂れ流す

自分がだつて夜の闇に溶け込みみたいのに

瞬くその刹那にしか

休むことが許されないなんて

あの日なくした消しゴムが
星にならないとは限らない。

いつのまに私の手を離れて

教室の端へ転がつて

廊下を抜け外へ出て

階段を転げ落ちて

坂を上つて降りて

ある時、一息に飛び立つ

筆箱を発つた白い星は

世界中の夜を流れる

チベットの少年も

アラブの商人も

エジプトの老人も

イギリスの姫も

アメリカのビジネスマンも

エクアドルの農家も

オーストラリアの政治家も

もちろん隣家の魔法使いも

パーティー中のおもちゃたちも

みな静かに目を閉じるだろう

安らかな顔で

自らの願いをつぶやくだろう

そうして私のアストライアーハーは

願いを聞いた私の神は

明日帰つてくるだろう

明日帰つてくるだろう君に
おかげりを言う準備をしておこう

明日からまた

私のもとで働いてもらうのだから
眠い目をこすりながら私は

筆箱のファスナーをそつと開いておく。

期待

原田翔真

太陽の目が変わるそうだ
きたる季節に何を見るか
何を感じようか

海の潮の匂いに

肌の焦げた匂いが重なる

一面に広がる砂浜の上で
西瓜が血を撒き散らす

申し訳程度の横風に

吊るされた水母が音を鳴らす

この日差し、この刺激

一周期前の景色が

脳裏に鮮明に蘇る

視界の狭間から

微かに響く夏の囁きに

今度は何を乗せようか